

仲秋の名月を今年は見ることができた。月は今やうさぎの住む、あるいはかぐや姫が住むというおとぎの国ではなく、宇宙服をつけた人間が歩き回る岩だらけの遊星に過ぎなくなってしまう。しかし、それでもなおお月を見ると懐かしい、おとぎの国を思い出す気がする。

● 共に見る月は満ちたり永らえばかくもやさしき宵もあるかな

妻と共に中秋の明月を眺め、その美しさを称える宵は、共に過ごした何十年かの苦労を忘れさせてくれた。このような宵をあと何回迎えることができるだろうか。

● 野道行く母に背負われみた月はどこまでゆけどわれを追い来る

戦後すぐに疎開先から帰ってきた時、我が家には風呂が無くしばらくは一キロほど離れた工場の量に付属した風呂へ通った。帰り道は眠くなり母に背負われ帰ることがしばしばあった。

● 時はいま月あきらかに星稀に烏鵲は飛びて枝をもとめよ

党首選の決選投票では、みごとに勝馬に多くの議員が集まった。恰も烏鵲が頼るべき枝を求めて飛び回る如くであった。しかし烏鵲の智はやがて後世に大きな災いを残すのではないか。

● 薄雲に隠れし月は家々の屋根をめぐりて影ぬぐいゆく

明るい月の光に黒々と屋根に影が落ちていたが、急に薄暗くなり影が消えてしまった。

● 朝空に月白々と現れてよそよしくもわれを見送る

白い月は滅多にみないが、いつもの月とは違う顔をしている。

● 三日月に寒さいや増す帰り道思うは汝の温かき鍋

現役時代は残業が多かった。冬の三日月は冴え渡った空にかかり、鎌の刃の如く冷えびえとした光を投げかけ、疲れた足を引きずり帰るわれに容赦無い厳しさを感じさせた。